

# 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に 関連する心理学的要因の検討

中嶋 みどり  
(2004年9月30日受理)

Psychological risk factors on child abuse-related behaviors among non-clinical mothers

Midori Nakajima

The main purpose of this study was to investigate the incidence of child abuse-related behaviors on non-clinical mothers. It also studied whether risk factor of child abuse on clinical population (such as abused experiences, aggression, and childcare support) were applicable or not on non-clinical mothers. 153 mothers completed questionnaires. The main results were as follows; (1) About 10% of mother on non-clinical mothers do abuse-related behaviors on their child, (2) There was about 25% of transgenerational transmission of child abuse. 11% of non-abused mother group do abuse-related behaviors on their child. (3) Aggression and rough spouse were dominant risk factors effect on abuse-related behaviors. These results indicate that child abuse-related behaviors were latent on non-clinicals.

Key words : child abuse, abused experience, aggression  
キーワード：児童虐待，被虐待経験，攻撃性

## 問題と目的

児童虐待の防止等に関する法律の施行に伴い、子育て支援サービスや育児休暇制度が充実し、児童虐待（以下、虐待）への関心が高まっている。それにも関わらず、虐待に陥る親が増えていることは、否めない（本間，2003）。子どもの虐待防止センターにおける電話相談においても、育児不安に駆られた母親からの相談が多く、「自分の子育てが虐待ではないか」という不安を訴える親も多い（広岡，1995）。潜在している虐待を早期発見・早期対処するため、さらには未然に防止する対策を講じていくためには、多様な人々を対象に虐待の実態を把握し、リスク要因を探ることが早急の課題だと考えられる。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：兒玉憲一（主任指導教員）、深田博己、  
宮谷真人、鈴木伸一

児童虐待の防止等に関する法律（第2条）によると、虐待は、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待の4つ類型に分けられる（表1参照）。また、児童虐待防止協会では虐待の重症度（平田，1995）を基準に虐待事例が扱われている（表2参照）。本稿では、この法律の当該行為を受けてきたのか（被虐待）、または、それを起こしているのか（虐待）をとりあげる。

虐待は、児童相談所などの専門機関で受理した事例件数の多さや虐待事件の報道によって、その深刻さが伝えられている。その一方で、当初から虐待は、多くが家庭内に潜在していると考えられてきた。しかし、家庭内のことに他者が立ち入りにくいいため、専門機関で扱われた虐待以外は研究対象となりにくく、それ故に専門機関が関わった臨床群の研究の蓄積が進んだ。本稿では、専門機関が虐待事例として関わった場合を臨床群、それ以外を非臨床群と区別する。

虐待の臨床群の研究では、国内外で同様な心理学的要因が指摘されている。虐待傾向のある親は、一般的

に自己評価が低い (Cooney & Braum, 1997; 西澤, 1994), 攻撃的な傾向が高く, 体罰を多用している (Haskett & Kistner, 1991; 西澤, 1994), 親自身が被虐待経験を持っている (Egeland, Jacovitz, & Srouge, 1988; Steele & Pollock, 1968), 十分に愛された経験がない (Steele, 1986; 津崎, 1992) といった個人特性をもっている。また, 家族や友人から孤立していたり, 夫との関係に満足していない (庄司, 2001; 玉井, 2001), 家族内外でも対人関係の問題をもっていることが指摘されている (庄司, 2001; 玉井, 2001; Trickett, Aber, Carlson, & Cicchetti, 1991)。

国外で非臨床群における虐待に相当する行為 (以下, 虐待相当行為) に関する研究では, ハイリスク要因 (被虐待経験など) をもつ親を対象に研究が多く行われてきた。その中で, 被虐待経験がある人の中に,

我が子への虐待が出現するという現象 (虐待の世代間連鎖) が検討されてきている。例えば, Straus (1979) は, 3歳から17歳の子どものいる1,146家族に対してインタビュー調査を行ったが, 被虐待経験をもつ親の方が被虐待経験を持たない親に比べて, 我が子への虐待が多く出現すると, すなわち虐待の世代間連鎖が高いと指摘している。一方, Browne & Saqi (1988) は, 地域の14,238家族に出産時および1ヶ月後にチェックリストを用いて, ハイリスク群を抽出した。2年後の調査では, そのハイリスクの予測があまり役立たなかったことを指摘している。この点について, Dingwall (1989) は, 虐待の定義が曖昧であった点を強く指摘している。このように, 非臨床群を対象とした研究では, 十分な検討がなされているとは言い難い。

日本では, 非臨床群に対する虐待相当行為に関する

表1 児童虐待防止等に関する法律 (第2条) による虐待の定義

虐待の種類	内容
身体的虐待	児童の身体に外傷が生じ, 又は生じるおそれのある暴行を加えること 例) 叩く, 殴る, 蹴る, 一室に拘束する, 戸外に締め込め, 布団蒸しにする, など
ネグレクト (保護の怠慢・遺棄)	児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置, その他, 保護者としての監護を著しく怠ること 例) 適切な食事を与えない, 乳幼児を家や車に残したまま出かける, 長期間不潔なままにする, 病気になるでも病院に連れていかない, など
性的虐待	児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること 例) 性交, 性的暴行をする, 性器や性交を見せる, ポルノの被写体を強要する, など
心理的虐待	児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと 例) 言葉による脅し, 無視や拒否的な態度, 自尊心を傷つけるような言動, 他のきょうだいとは著しく差別的な扱いをする, など

表2 虐待の重症度判定基準

(1) 生命の危険あり

子どもの生命の危険が「ありうる」, 「危惧する」もの。

(2) 重度虐待

今すぐには生命の危険はないと考えられるが, 現に子どもの健康や成長や発達に重要な影響が生じているか, 生じる可能性があるもの。子どもと家族の指導や, 子どもを保護するために, 誰かの介入 (訪問指導, 一時分離, 入院など) が必要である。

(3) 中度虐待

今は入院を要するほどの外傷や栄養障害はないが, 長期に見ると子どもの人格形成に重い問題を残すことが危惧されるもの。誰かの援助介入がないと, 自然経過ではこれ以上の改善が見込めないもの。

(4) 軽度の虐待

実際に子どもへの暴力があり, 親や周囲の者が虐待と感じている。しかし, 一定の制御があり, 一時的なものと考えられ, 親子関係には重篤な病理が見られないもの。しかし, 親への相談は必要である。

(5) 虐待の危惧あり

暴力やネグレクトの虐待行為はないが, 「叩いてしまいそう」 「世話をしたくない」 などの子どもへの虐待を危惧する訴えがある。

注) 平田 (1995) より抜粋した, 虐待の重症度判定基準である。

先行研究は少ない。社会福祉法人子どもの虐待防止センター（1999, 2000, 2001）が首都圏の母親を対象とし、調査を行った結果、約1割の母親が「たたく」「泣いても放っておく」など、子どもに虐待相当行為を繰り返していることが明らかになった。また、気の合わない子どもがいたり、育児に協力してもらえない人がいない、特に夫からの協力が得られない、あるいは母性意識の低い母親が虐待群に多かった。渡辺・萱間・相模・妹尾・大原・徳永（2002）も、非臨床群を対象に虐待相当行為の調査を行った。そのリスク要因についてロジスティック回帰分析を行った結果、気の合わない子がいること、夫が育児に非協力的であること、子どもの数の多さが関与していると述べている。

虐待の加害者としては、平成13年度全国児童相談所の虐待相談の統計より、父親が29%（実父22.6%、継父など6.4%）、母親が64.5%（実母63.1%、継母など1.4%）である（本間, 2003）。このように、加害者は母親が殆どである。先行研究の上では、父親、母親とわけて検討されていることは少なく、母親が対象となっているか、親（父、母を問わずどちらか）あるいは両親が対象となっていることが多い。本稿においても、虐待の加害者の殆どが母親であることから、非臨床群の母親を対象を絞った。

よって、本稿では、非臨床群の母親にどの程度、虐

待相当行為が行われているのかを知ること、そして虐待相当行為が発生するリスク要因を検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 虐待相当行為に関連する調査に協力が得られそうな対象として、子育ての講演会および育児サークルに参加し、就学前までの子どもを育てている母親を被調査者とした。

**調査内容** 以下の内容から構成した（尺度②から⑦は付表を、尺度⑧は表3を参照）。

①**回答者の属性** 性別、年齢、子どもの性別と年齢、家族構成、居住形態をたずねた。

②**被虐待相当行為経験** Child Abuse and Trauma Scale (Sanders & Becker-Lausen, 1995), Childhood Trauma Questionnaire (Bernstein, Fink, Handelsman, Foote, Lovejoy, Wenzel, Sapareto, & Ruggiero, 1994) を邦訳した。この他、日本の虐待の定義と照らし合わせ、虐待の専門家の意見を参考に項目を追加した。それらを大学院生6名にKJ法を用いて分類させ、30項目（0=全くなかった～4=いつもそうだった）とした。なお、性的虐待に相当する項目は、フラッシュバックや回答の拒否の高まりが予想された為、加えていない。

表3 子どもへの虐待相当行為の回答の割合

	全くない	1度くらいたまにはした	時々した	いつもした	
<b>身体的虐待</b>					
平手やげんこつでお子さんを叩くことがある	38.6	13.7	40.5	7.2	0.0
お子さんを蹴ることがある	78.4	13.1	7.8	0.7	0.0
押し入れや小屋などに閉じこめることがある	88.2	7.8	3.3	0.7	0.0
冬にベランダや家の外に閉め出すことがある	90.2	6.5	2.6	0.7	0.0
棒やベルトなど、何らかのものをを用いて叩いたことがある	90.9	3.9	5.2	0.0	0.0
<b>ネグレクト</b>					
お子さんが泣いていても、放っておくことがある	21.6	8.5	56.2	13.7	0.0
家に小さなお子さんをお子さんが幼かった頃、おいたまま出かけた	61.4	14.4	20.3	3.9	0.0
自動車の中に小さなお子さんをお子さんが幼かった頃おいて、用を足した	63.4	9.8	22.9	3.9	0.0
お子さんを風呂に入れたり、下着を替えないことがある	83.0	3.3	13.7	0.0	0.0
お子さんに食事を与えないことがある	94.1	3.9	2.0	0.0	0.0
<b>心理的虐待</b>					
大声でどなってしかることがある	11.8	3.3	54.2	27.4	3.3
お子さんを無視することがある	62.7	14.4	20.9	2.0	0.0
お子さんが傷つくようなことを言うことがある	42.5	12.4	38.6	5.8	0.7
あるお子さんだけを差別することがある	90.9	3.3	5.8	0.0	0.0

注) 表内の数字の単位は、%(パーセンテージ)である。

③ **自尊心**：自尊意識尺度（山本・松井・山成，1982）の10項目を用いた。

④ **母性意識**：母性意識尺度（大日向，1988）のうち、母親役割の積極的・肯定的な意識尺度の6項目を用いた。

⑤ **攻撃性**：Buss-Perry攻撃性質問紙（嶋田・宇津木・坂井・島井，1997）の各因子から因子負荷量の高い項目を3項目ずつ、計12項目を用いた。

⑥ **育児サポート**：子育てに関わる人、困った際に相談したり、助けてもらうサポート資源（祖父母、友人など）がいるかどうかの3項目でたずねた。

⑦ **配偶者の育児サポート**：社会福祉法人子どもの虐待防止センター（1999）が用いた調査報告書の項目を参考にし、配偶者とコミュニケーションがとれるか、協力してくれるかといった3項目を用いた。

⑧ **子どもへの虐待相当行為**：児童虐待防止等に関する法律に該当する虐待行為や社会福祉法人子どもの虐待防止センター（1999）が用いた調査報告書の項目を参考に14項目（0=全くない～4=いつもそうだ）で構成した。

**手続き** 調査用紙は、無記名式であり、手渡しで渡し、その場で回収ないしは郵送で回収した。

もが泣いていても、放っておくことがある」「大声でどなって叱る」「平手やげんこつでたたくことがある」のような軽い体罰や叱責に関わるものであった。逆に少なかったのは、「子どもに食事を与えないことがある」「ものを用いて子どもをたたくことがある」であった。表2の虐待の重症度（平田，1995）からみて、臨床群と比較すると非常に軽度なものであった。しかし、非臨床群にも、子どもへの虐待相当行為が存在することが明らかになった。

子どもへの虐待相当行為の合計点の平均は、9.20点、得点は0点から25点に分布した（図1参照）。

非臨床群の母親が調査対象となったため、得点の低い方に分布が偏った。なお、虐待環境という観点から、虐待の定義や重症度、既存の尺度のカットオフポイント（社会福祉法人子どもの虐待防止センター，1999，2000，2001）を虐待の専門家2名と共に検討した。本稿の調査項目と照らし合わせたところ、14項目のうち、8項目以上に「たまにそうだった」(2)と回答するか、6項目以上に「時々そうだった」(3)と回答している程度が、重症度からみて虐待の危惧あり以上に相当すると考え、16点を虐待相当行為あり群と設定した。虐待相当行為あり群は、21名(13.7%)となった。

## 結果

### (1) 分析対象者について

調査用紙は、153名（回収率71.8%）から回収した。母親の平均年齢は、32.5歳であった。

### (2) 子どもへの虐待相当行為について

子どもへの虐待相当行為、各項目の回答の割合を表3に示す。全項目の中で、特に多かったのは、「子ど

### (3) 被虐待相当行為経験の頻度

被虐待相当行為経験の頻度の合計点の分布を図2に示す。平均得点は25.8点であった。得点は、4点から105点に分布し、低得点の方に分布が偏った。経験頻度が高かったのは、「平手やげんこつで叩かれた」のような軽い体罰や叱責に関わる経験であった。逆に、「食事、洗濯などの世話をしてもらえなかった」「病気やけがをしても、病院に連れていってもらえなかった」といった最低限の養育を受けていない内容の経験頻度は低かった。

子どもへの虐待相当行為と同様に、虐待環境という観点から、虐待の定義や重症度、典型事例や既存の尺度（Sanders & Becker-Lausen，1995；Bernstein et al.，1994）のカットオフポイントを虐待の専門家2名と共に検討した。本稿の調査項目と照らし合わせたところ、30項目のうち23項目以上に「たまにそうだった」(2)、または16項目以上に「時々そうだった」(3)と回答する程度を被虐待相当環境にあるものとし、46点以上を被虐待相当行為経験あり群と設定した。被虐待相当行為経験あり群は、27名(17.6%)となった。

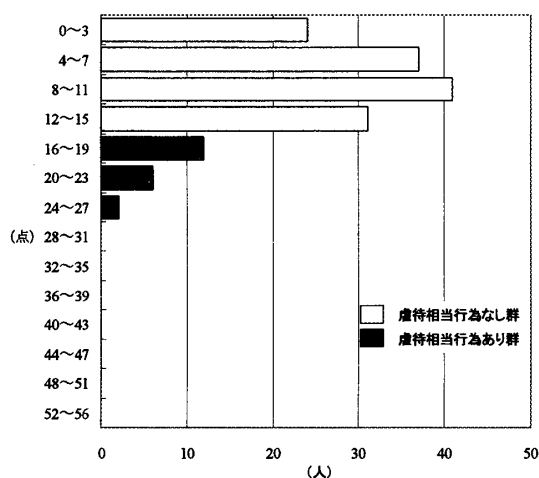


図1 子どもへの虐待相当行為の合計点の得点分布

### (4) 虐待相当行為の世代間連鎖について

先行研究（例えば、Kaufman & Zigler，1987）と

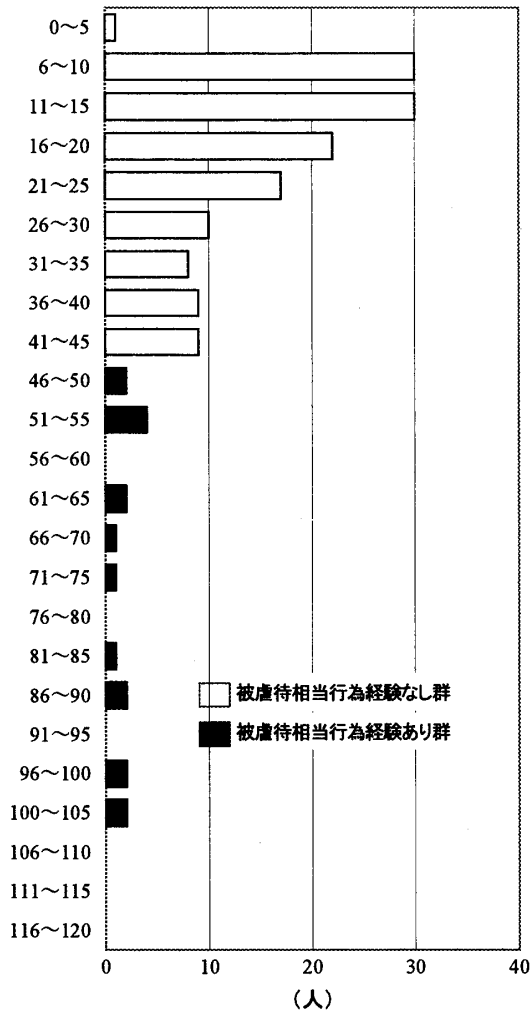


図2 被虐待相当行為経験頻度の合計点の分布

同様、子ども時代に被虐待相当行為経験を持っており、子どもへの虐待相当行為を行っている親の割合を算出した(表4参照)。世代間連鎖率を算出すると、25.9%であった。一方、被虐待相当行為経験を持たないのに、子どもへ虐待相当行為を加えている人の割合は11.1%であった。被虐待相当行為経験をもつ人の方が子どもへ虐待相当行為を生じさせるリスクが2倍以上の高率であった。相対危険度を算出したところ、2.33と被虐待相当行為経験をもつ群の方が子どもへ

表4 被虐待相当行為経験と虐待相当行為の割合

	虐待相当行為		
	あり	なし	計
	被虐待相当行為経験あり	7 (25.9%)	20 (74.1%)
被虐待相当行為経験なし	14 (11.1%)	112 (88.9%)	126

の虐待相当行為のリスクが高いと示された。また、被虐待相当行為経験と虐待相当行為の間でケンドールの順位相関係数を算出したところ、弱い相関が認められた。(r= .30)

(5) 子どもへの虐待相当行為の高低に関わる要因の検討

子どもへの虐待相当行為に影響を及ぼす要因を検討するため、虐待相当行為なし群と虐待相当行為あり群に分けて $\chi^2$ 検定を行った。母性意識や攻撃性、自尊心といった個人特性は、平均値±1SD以上を基準に高低群に分けた。虐待相当行為なし群と比較すると、虐待相当行為あり群は、近所に住んでいない友人への相談をしない( $\chi^2=4.24, p<.05$ )、気の合わない子どもがいる( $\chi^2=6.49, p<.05$ )、配偶者が子どもを手荒に扱うので気になる( $\chi^2=5.07, p<.05$ )と有意に多く回答していた。また、個人特性について、虐待相当行為あり群は、虐待相当行為なし群と比較して、被虐待相当行為経験あり群( $\chi^2=5.18, p<.05$ )、母性意識低群( $\chi^2=3.80, p<.05$ )、攻撃性高群( $\chi^2=5.90, p<.05$ )の者が有意に多かった。

(6) 虐待相当行為発生のリスク要因の検討

被虐待相当行為経験、個人特性および育児サポートと子どもへの虐待相当行為との関係を検討するために、子どもへの虐待相当行為を従属変数、個人特性(被虐待経験、攻撃性、母性意識、自尊心)、育児サポート(近所ではない友人への相談、配偶者が育児に非協力的、配偶者と話ができる、配偶者が手荒に扱うので気になる)を独立変数とした回帰分析を行うことにした。なお、従属変数である子どもへの虐待相当行為の分布が正規分布にならなかったため、ロジスティック回帰分析を行った(表5参照)。その結果、攻撃性、「配偶者が手荒に子どもを扱うので気になる」で有意な結果が得られた。即ち、攻撃性が高い群は、低い群に比べ2.08倍、手荒に子どもを扱う配偶者の

表5 個人特性および育児サポートを独立変数、子どもへの虐待相当行為を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果

	$\beta$	Wald	p	Exp(B)
被虐待相当行為経験(なし=0, あり=1)	.78	1.50	.22	1.17
母性意識	.02	.06	.81	1.02
攻撃性	.08	6.59	.01	2.08
自尊心	.07	3.40	.07	1.08
近所ではない友人への相談(する=0, しない=1)	.08	.03	.86	1.09
配偶者が育児に非協力的	.16	.43	.51	1.17
配偶者と話ができる	-.03	.01	.92	.97
配偶者が手荒に扱う	.80	5.48	.02	2.22

場合、そうでない配偶者に比べて、2.22倍の子どもへの虐待相当行為のリスクが高まるという結果が得られた。

## 考 察

### (1) 非臨床群の母親における虐待相当行為の様相

既に述べたように、子どもへ虐待相当行為を加えている母親が13.7%おり、先行研究（社会福祉法人子どもの虐待防止センター、1999, 2000, 2001；渡辺他, 2002）同様、1割程度の非臨床群の母親が子どもに虐待相当行為を繰り返しているという結果が得られた。このことから、非臨床群の母親にも、軽度ではあるが、虐待相当行為が存在していることが示された。程度はひどくないにしても、頻度が多くなったり、何らかのストレスがかかることによって、虐待の臨床群に発展していく可能性を否定することは出来ない。よって、非臨床群を対象とし、虐待および虐待相当行為に関する研究に取り組んでいく必要があることが示唆された。

本稿では、虐待の調査に回答が得られそうな対象として、子育てに関心のある母親を選んだ。そのため、サンプリングに偏りがあるという欠点もあるので、今後は対象の選択や人数を十分考慮し、多くの対象で確認していく必要があると言える。

また、本稿のデータは、質問紙調査から得たものであり、実態とのずれが多少生じている可能性もあり、質問紙法の限界を考慮し、安易な一般化を避けなくてはならないという限界もある。

### (2) 被虐待相当行為経験が虐待相当行為に及ぼす影響について

本稿では世代間連鎖率が25.9%であった。Kaufman & Zigler (1987) が臨床群、非臨床群の研究から検討して提唱した30±10%という数値からすれば、さして外れた数値ではない。しかし、本稿で用いた被虐待相当行為経験に関する調査項目は、臨床群が受けた虐待に比べると、軽度である。よって、世代間連鎖率という数字だけで判断するのではなく、臨床群の虐待の世代間連鎖とは様相が異なるということを踏まえておかななくてはならない。連鎖は虐待のみならず、しつけの方法や子どもとの遊び方、家事の仕方などを含め、親子関係の営み全般が世代間連鎖することがある（長谷川, 2003）。今後、臨床群と非臨床群のもつ集団の質の違いを十分に検討し、世代間連鎖そのものにも様々な様相があることをふまえ、その上で世代間連鎖率をとらえなくてはならないと考えられる。

被虐待相当行為経験は、虐待相当行為の発生に直接つながるものではないが、本稿では被虐待相当行為経験をもつ人の方が、虐待相当行為を生じさせている割合が2倍以上の高率であった点は、注目に値する結果である。

一方、被虐待相当行為経験を持たないのに、子どもへ虐待相当行為を加えている人が11.1%いたことも事実である。即ち、被虐待相当行為経験がなくても、ある時点で虐待相当行為を加えてしまう場合があることを示した結果であり、虐待に陥らせる他の要因にも常に注目し、研究を進めていかななくてはならない。

### (3) 虐待相当行為の発生のリスクに及ぼす心理学的要因の検討

$\chi^2$ 検定の結果とロジスティック回帰分析で有意であった攻撃性と配偶者の要因を中心に考察する。

①**攻撃性** 攻撃性の高い親は、攻撃的な行動パターンが生じやすいことから、虐待相当行為のハイリスク要因として位置づけた対応が必要になることが示唆された。攻撃性が高いということは、短気で、敵意が強く、身体的・言語的攻撃を多く行うことを意味する。従来、攻撃性は臨床群の研究でも虐待が生じるリスクを高める個人特性であると言われている（Haskett & Kistner, 1991）。非臨床群の研究においても、攻撃性の高い母親が問題解決行動として、体罰を用いて育児を行っていることを指摘する研究もある（西澤, 1994）。

攻撃性に対する対処スキルの乏しさや不適切さを補うために、問題解決能力を高めたり、子どもの発達に関する知識や育児ストレスの対応に関する教育が必要であろう。教育的なアプローチをする以前に、子ども時代のやり直しとも言うべく、他人を信頼して甘えるという親自身の訓練が必要であると指摘する研究もある（鶴飼, 2000）。

②**配偶者の要因** 本稿では「配偶者が手荒に子どもを扱うので、気になる」と回答した群に、虐待相当行為あり群が多いことから、非臨床群において、重篤でないにしても、配偶者の要因がリスク要因になっていることが明らかになった。

臨床群の研究においては、虐待を行う親の家族は虐待行為を抑止する存在というよりも、黙認する姿勢をとることが多く、虐待家族の適応性を向上させ、虐待を抑止することができない（中村・鷹尾, 1989）と指摘されている。こういった場合は、夫婦で虐待をなくす教育を受ける必要があると考えられる。

他の非臨床群の母親に対する虐待の研究でも、配偶者が虐待を加えている可能性を検討する必要があると指摘する研究がある(中谷, 2002)。以上のことから、今後、非臨床群の父親に対しても、虐待相当行為やそれに関連する要因を検討する必要があることが示唆された。

③その他の要因 一方、配偶者が育児に非協力的かどうか、配偶者と育児について話ができるかどうかといった項目では、虐待相当行為について有意差がみられなかった。臨床群を対象とした研究(庄司, 2001; 玉井, 2001; Trickett, et al., 1991)においても、非臨床群を対象とした研究(渡辺他, 2002)においても、配偶者からの育児サポートや関係の満足度の低さは、虐待相当行為のリスク要因となることが指摘されている。現代の家庭の多くが核家族という実態からすれば、父親が家事や育児に参加して母親を支えるだけでなく、母親とは異なる視点から子どもをとらえることで、親として成長する力や母親の精神衛生面を高め、子どもへの対応にゆとりが生まれると推察される(福丸・無藤・飯長, 1999)。以上のことから、協力的かどうかといった母親の一方的な捉え方ではなく、夫婦の関係性に焦点を当てた検討をする余地があるといえる。

この他、臨床群で虐待相当行為のリスク要因として挙げられている母性意識や自尊心の低さと虐待相当行為との関連が非臨床群でみいだせなかった。このような心理学的要因が非臨床群と臨床群の違いを示す要因なのかどうかも、今後検討されなくてはならない。

#### (4) 今後の課題

本稿より、非臨床群の母親にも、軽度ではあるが、虐待相当行為が存在していることが示された。今後、非臨床群を対象とし、虐待および虐待相当行為に関する研究に取り組んでいく必要があると言える。

虐待に関係した問題は母子の問題ではなく、家族全体の問題であり、様々な要因が複合的に絡み合っている。特に、非臨床群の虐待相当行為の研究は、臨床群を対象とした場合より、虐待をとらえる尺度の感受性を要する。また、非臨床群の場合、臨床群よりも虐待や虐待相当行為が起こりにくいため、虐待相当行為がおりやすい文脈や育児意識を考慮するなど、虐待相当行為と関連のありそうな要因を緻密に精査しなくてはならない。さらに、発生率などの数字にとらわれて一般化することは、実態に肉薄しておらず、危険である。虐待に関連したどのような研究を実施するにも、扱う内容や量に限らず、多くの限界がつかまとう

ため、必ずしも原因と結果の関係が明確に示されるものとは言い難い。しかし、虐待を予防・防止するためには、今後、山積された課題や問題点を改善すべく検討が必要である。

## 引用文献

- Bernstein, D. P., Fink, L., Handelsman, L., Foote, J., Lovejoy, M., Wenzel, K., Sapareto, E., & Ruggiero, J. 1994 Initial reliability and validity of a new retrospective measure of child abuse and neglect. *American Journal of Psychiatry*, **151**, 1132-1136.
- Browne, K., & Saqi, S. 1988 Approach to screening for child abuse and neglect. In K. Browne, C. Davies, & P. Stratton (Eds.), *Early prediction and prevention of child abuse*. Chichester: John Wiley Sons. Pp. 57-85.
- Coohey, C., & Braum, N. 1997 Toward an integrated framework for understanding child physical abuse. *Child Abuse and Neglect*, **21**, 1081-1094.
- Dingwall, R. 1989 Some problems about predicting child abuse and neglect. In O. Stevenson (Ed.), *Child abuse: public policy and professional practice*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf. Pp. 28-53.
- Egeland, B., Jacovitz, D., & Srouge, L. A. 1988 Breaking the cycle of abuse. *Child Development*, **59**, 1080-1088.
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児の子どもをもつ親における仕事観・子ども観・父親の育児参加との関連 発達心理学研究, **10**, 189-198.
- 長谷川博一 2003 たすけて! 私は子どもを虐待したくない 世代連鎖を断ち切る支援 径書房 Pp. 13-40.
- Haskett, M. E., & Kistner, J. A. 1991 Social interactions and peer perceptions of young physically abused children. *Child Development*, **62**, 979-990.
- 平田佳子 1995 子どもの虐待電話相談の活動 小児内科, **27**, 123-127.
- 広岡知彦 1995 躰と小児虐待 小児内科, **27**, 26-29.
- 本間博彰 2003 児童虐待の現状と課題—児童虐待と医療・保健のかかわりをめぐって— 臨床精神医学, **32**, 123-127.
- Kaufman, J., & Zigler, E. 1987 Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 186-192.

- 中村雅彦・鷹尾雅裕 1989 児童の問題行動と被虐待との関連性に関する研究—臨床心理学と社会心理学の観点からの接近の試み— 愛媛大学教養部紀要, 22, 21-39.
- 中谷奈津子 2002 虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の認知に関する研究—保育所・地域子育て支援センターを中心として— 保育学研究, 40, 29-36.
- 西澤哲 1994 子どもの虐待 子どもと家族への治療的アプローチ 誠信書房 Pp. 54-79.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- Sanders, B., & Becker-Lausen, E. 1995 The measurement of psychological maltreatment: Early data on the child abuse and trauma scale. *Child Abuse and Neglect*, 19, 315-323.
- 社会福祉法人子どもの虐待防止センター 1999 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書
- 社会福祉法人子どもの虐待防止センター 2000 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書
- 社会福祉法人子どもの虐待防止センター 2001 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書
- 庄司順一 2001 子ども虐待はなぜ起こるのか 高橋重宏(編) 子どもへの最大の人権侵害 子ども虐待 有斐閣 Pp. 111-124.
- 嶋田洋徳・宇津木成介・坂井明子・島井哲志 1997 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成(3)—社会人のデータによる因子の妥当性・信頼性の検討— 日本心理学会第61回大会発表論文集, 905.
- Steele, B. 1986 Notes on the lasting effects of early child abuse throughout the life cycle. *Child Abuse and Neglect*, 10, 283-291.
- Steele, B. F., & Pollock, C. B. 1968 A psychiatric study of parents who abuse small children. In R. E. Helfer, & C. H. Kempe (Eds.), *The battered child*. University of Chicago Press. Pp. 89-133.
- Straus, M. A. 1979 Family patterns and child abuse in a nationally representative sample. *International Journal of Child Abuse and Neglect*, 3, 213-225.
- 玉井邦夫 2001 子どもの虐待を考える (講談社現代新書) 講談社
- Trickett, P.K., Aber, J. L., Carlson, V., & Cicchetti, D. 1991 Relationship of socioeconomic status to the etiology and developmental sequelae of physical child abuse. *Developmental Psychology*, 27, 148-158.
- 津崎哲郎 1992 2.児童虐待—福祉機関の援助と課題— (第33回日本児童青年精神医学会総会シンポジウム) 児童青年精神医学とその近接領域, 33, 396-399.
- 鵜飼奈津子 2000 児童虐待の世代間伝達に関する一考察 心理臨床学研究, 18, 402-411.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 自尊感情尺度 堀洋道・山本真理子・松井豊(編) 1994 心理尺度ファイル—人間と社会を測る— 垣内出版 Pp. 67-69.
- 渡辺友香・萱間真美・相模あゆみ・妹尾栄一・大原美知子・徳永雅子 2002 首都圏一般人口における児童虐待の実態とその要因 日本社会精神医学雑誌, 10, 239-246.

(主任指導教員 兒玉憲一)



付表 本研究で使用した尺度 (方法 調査内容の②～⑦)

②被虐待相当行為経験 (0 = 全くなかった～4 = いつもそうだった)

1. きょうだいや他の家族と差別されるような扱いを受けることがあった
2. 親に平手やげんこつでたたかれることがあった
3. 何も悪いことをしていないのに、どなられたり、ののしられることがあった
4. 親に恥をかかされるようなことをされることがあった
5. 親に棒やベルトなど、何らかのものをういてたたかれることがあった
6. 食事、洗濯などの世話をしてもらえなかった
7. 親は私の学校のことや興味があることに関心を示してくれなかった
8. 親にものを投げつけられることがあった
9. 病気やケガをしても、病院に連れていってもらえないことがあった
10. 親は一方的に自分の意見に従うよう私に強要することがあった
11. 親に、私が傷つくようなことを言われることがあった
12. しかられるときに、自分がしかられるのは当然だと思った
13. まだ私が幼いときに、親は車の中を子どもだけにして、どこかに用を足しに行ってしまうことがあった
14. 私の着ていた服は、いつも汚れていた
15. 押し入れや小屋などに閉じ込められることがあった
16. 親は私の世話をしたり、守ってくれた
17. 親に蹴られることがあった
18. あなたをしかるときに、親は真剣に怒っていた
19. 親に適切な食事を与えてもらった
20. 叱られるときに理由があって、それ相応の叱られ方だと思った
21. 私がまだ幼い頃、親は家を子どもだけにして、どこかに用を足しに出かけてしまうことがあった
22. 両親に望まれていない子だと感じた
23. 家で理由もなく、暴力を受けることがあった
24. 日用品や学校に必要なものを買ってもらえないことがあった
25. 冬に家の外やベランダに閉め出されることがあった
26. 両親に嫌われていると感じた
27. ほんの些細なことでも、親にひどくしかられた
28. 親は、私の身体や顔などについて、悪口を言うことがあった
29. 親に放っておかれていると感じた
30. しかられる時、大きな声でどなりちらされることがあった

③自尊心 (1 = 全く当てはまらない～5 = 非常に当てはまる)

1. 私は少なくとも人並みには、価値ある人間である
2. 私はいろいろな素質を持っている
3. 敗北者だと思うことがよくある
4. 物事を人並みには、うまくやれる
5. 自分には自慢できることがあまりない
6. 自分に対して、肯定的である
7. 大体において、自分に満足している
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい
9. 自分はまったくだめな人間だと思うことがある
10. 何かにつけて、じぶんは役に立たない人間だと思う

④母性意識 (1 = 違う～4 = その通りである)

1. 親であることが好きである
2. 親になったことで、人間的に成長できた
3. 親としてふるまっているときが一番自分らしいと思う
4. 親であることに生きがいを感じている
5. 親になったことで、気持ちが安定して、落ち着いた
6. 親であることに充実感を感じる

⑤攻撃性 (1 = 全く当てはまらない～5 = 非常に当てはまる)

1. 友人の中では、私のことを陰であれこれ言っている人が

いるのかもしれない

2. ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる
3. なぐられたら、なぐり返すと思う
4. 意見が対立したときは議論しないと気がすまない
5. 私を嫌っている人は結構いると思う
6. いらいらすると、すぐ顔に出る
7. 挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない
8. 友人の意見に賛成できないときは、はっきり言う
9. 対人関係において、嫌いな人に出会うことが多い
10. かつとなることを押さえるのが難しいときがある
11. 相手が先に手を出したとしても、やり返さない
12. 自分の権利は、遠慮しないで主張する

⑥育児サポート

(1) 日常の子育てには、どなたが携わっていますか (当てはまるもの全てに○をつけて下さい)

1. 自分
2. 配偶者
3. 祖父・祖父母
4. 親戚 (自分のきょうだいを含む)
5. 保育園・ベビーシッター
6. その他 ( )

(2) 子育てで困ったときに、相談にのってくれる方は、どなたですか (当てはまるもの全てに○をつけて下さい)

1. 配偶者
2. 祖父・祖父母
3. 親戚 (自分のきょうだいを含む)
4. 近所の友人
5. 近所に住んでいない友人 (例、学生時代の友人、メールのやりとりをする遠方の友人)
6. 保健所の保健婦さんなど、専門機関の職員
7. 保育園の先生・ベビーシッター先の職員
8. 育児雑誌
9. 特にいない
10. その他 ( )

(3) 子育てで困ったときに、実際に子育てを手伝ってくれる方は、どなたですか (当てはまるもの全てに○をつけて下さい)

1. 配偶者
2. 祖父・祖父母
3. 親戚 (自分のきょうだいを含む)
4. 近所の友人
5. 近所に住んでいない友人 (例、学生時代の友人、メールのやりとりをする友人など)
6. 保健所の保健婦さんなど、専門機関の職員
7. 保育園の先生・ベビーシッター先の職員
8. 特にいない
9. その他 ( )

⑦配偶者の育児サポート

(1) 配偶者がもう少し家事や育児に頑張ってくれたり、協力してくれたらいいと思う (1 = 全く思ったことがない～5 = 毎日そう感じている)

(2) あなたと配偶者とのコミュニケーションについて、お聞かせ下さい (1 = 安定していて、何でも話せる～5 = 関係が不安定で、全く話ができない)

(3) 配偶者が子どもを手荒に扱うので、気になったり、心配することがある (1 = 全く感じたことがない～5 = 毎日そう感じている)

(4) 配偶者は、あなたに気を配ったり、思いやったりしてくれる。(1 = 全く思ったことがない～5 = 毎日そう感じている)